希望

葉桜照月

ここが未開の広野だったならば、私は人類史に残る大探検に挑んだ者として数多の少年少女の憧憬の的になると思うのだが、残念ながらそうではない。ここはもう千年は前に探検隊が開拓しているし、住人もいる。何より私を憧れの的とする少年少女などいない。

私が夢と闘志に燃える熱い人間だったならば、この任務を目を輝かせながら遂行させたかもしれないが、残念ながらそうではない。そこまで楽天的にはなれない。この仕事はいつだって陰鬱で、欺瞞に満ち、虚飾に彩られている。

道端にいつのものとも知れない人骨が増えてきたら、目的地の近づいた証拠だ。おそらくはかつての住民。この世界にはもう火葬する燃料も土葬する労力も残っていない。死者は捨てられる。そして土へと還りゆく。

まだ極北ではないから雪は疎らに積もるのみで、野営もまだ簡単だ。だがこれからの旅路でいつかは氷に閉ざされた極北の北の果ての集落に行くことにはなる。万年雪の雪原で一人野営をするのは、正直翌朝に冷たくなっているリスクを伴うから怖い。今は凍死の危険はないが、野盗の危険はある。もっとも、野盗なんて野蛮かつエネルギッシュな行為なんてできないほどにこの世界の人間は疲弊しているし、万が一遭遇しても撃退できる戦力はある。恐れるべきは、かつて仕掛けられた狩猟用や侵入者対策用の罠と、なによりもこれから向かう集落の人々が排他的になっていることだ。

結論から言うと、どちらも心配はいらなかった。罠の跡はあったが作動したまま放置されていた。極めて原始的な落とし穴式の罠で、荒いしそこまで深くもない。人間だったら容易に脱出できそうだった。二つ目、住民感情の懸念もまた、簡単に杞憂だと分かった。この住民たちにとうに感情はない。早い話が、全滅していた。かけた皿を大事そうに抱えた子どもらしき人骨達や、かつては畑であっただろうただの荒地に打ち捨てられた骨に残った歯形が、この集落の崩壊の過程を偲ばせる。

村の中心部は少しだけ小高くなっていて、ひとまわり大きな廃墟があった。多分ここがこの集落の長の家だったのだろう。石造りの土台の上にほんのわずかな構造物があるばかり。他の家よりも荒れ方がひどく、土台の石は火に焼かれた跡と思しきひびがある。廃墟に向けて統制教会の正規の挨拶儀礼を行った後、何度言ったかはもう覚えていない、お決まりの台詞を言う。とうに見る人もいなくなったこの集落でそんなことをする意味も価値も利益もないが、正規の方法に則ることは義務である。

「私は『統制教会』二等遊師、エレウテリア。統制教会告示第零号に基づき、この集落の皆様に伝達します。…先の大災害により麻痺した各インフラ網について、約十インドクトほどの時間はかかるものの、再構築が見込まれており、既に復旧作業が始まっています。ですが、中央都市の被害は甚大で、中央集権統治機構の再建を断念することになり、統制教会は少なくとも向こう五インドクトのあいだ、全地方都市群落に対して自治権を付与することを決定しました。私は今日一日の間、こちらに留まりますので、質問事項のある方はおたずねください」

無人の廃集落に抑揚なき声が響く。この響きは空気を震わせこそすれ、私以外の鼓膜が震えることはない。

＊

希望を込めた優しい嘘。
裏返せば、真実は絶望にまみれた、残酷なものということになる。

あの日。全世界を壊滅的な大災害が襲った。隕石衝突か、神の怒りか、今となっては分からないが、どちらにせよ、世界文明は滅んだということだけは確かだった。すべてのインフラは麻痺したが、治安は悪くならなかった。対立を起こすほど人が残らなかったからだ。中央都市の人口は後に知ったところだと九割五分を失ったらしい。

その後、残された人々は、あの大災害で死んだ方がいくらかましだっただろうというほどに苦境にあった。道には秋の落ち葉と遜色ない量の死骸と、そこから湧き出る腐臭、蠅に蛆。愛した人を見つけて泣く声があった。狂気に染まって叫ぶ声があった。状況を飲み込めずに惑う子供の声があった。

だがそれは最初のひと月だけに過ぎなかった。私達は理解したのだ。枯れるほど泣いても無駄だと。かすれるまで叫んでも無駄だと。目の前の出来事を理解しようとしたところで、キャパオーバーもいいところなのだと。

人々はみな精神を病んだ。眼を閉じ、耳を塞ぎ、呻く以外に声も出さず、ただ死を待つ。これはただの悪い夢なのだとただ言い聞かせた。覚めない夢を少しでも早く終わらせるために、手首を切り、喉を突き、頭を撃つ。人々はみな、精神を病んだ。

そういう意味では、私はいくらか幸福であったのかもしれない。親はしばしば家を空けていたし、中等教育終了後は統制教会図書館に籠りきりだったから、失ってショックを受ける誰かが私にはいなかった。もちろん司書さんの亡骸を見たときはひどく動揺したが、愛する人や昨日別れたばかりの友人は私にはいなかった。それだけの話だ。キャパオーバーなのは他の人と全く変わらないが、精神を病んでしまうほどには、摩耗されていなかったのだ。

そういった人間が他にいなかったわけではなかった。中央都市の再興を目指す人々もいた。彼らは彼らなりに、馴れ馴れしく寄り添ってくる絶望を何とか振り払いながら生きていた。その中心にいたのが、統制教会本部長、つまり導師さま、統制教会の実質的な統治者だった。

導師さまは、間違いなく最も深い絶望を味わったお方だったと思う。祈禱師たる導師さまは、神の御言葉に従えば世界が良くなるという信念のもと活動しておられた。その神が無警告に、無差別に、無慈悲に、文明を滅ぼしたのだ。自身の半生を捧げた神は、この危機を看過している。放置している。黙認している。自分に何の失態があったのか、常に自問なさっていた。通常であれば信仰心すら失ってしまいそうな世紀末の世界にあって、導師さまは再び立ち上がった。まずは人々に光を取り戻すために、中央都市を一から作り直す。そう決心なさったのだ。

ある日、導師さまは私を呼ばれた。大災害の前、一度だけ導師さまとお話したことがある。統制教会図書室に毎日籠っていたら、そこな少女よ、と話しかけられた。書物を読むのはよいことであるから、これからも励みなさい。それだけ言って去っていった紳士がかの導師さまであると知ったのは、司書さんに教えて貰って初めて知った。

導師さまはこんなことを仰った。

「少女よ。卿の向学心は大災害以前の統制教会中央都市本部内で知らぬ者はいなかった。汗牛充棟であったあの図書館もその悉くが灰燼と化したが、卿の知識に少しでも蓄積したものがあれば、烏有に帰した書物たちも無駄ではなかったと言えよう。……これから中央都市は再起動を始める。だが卿のような博覧強記は、当面は力仕事を求められる再起動において持て余すことになる。よって、卿には別の任務を与える。統制教会新改訂玉条に拠る統制教会本部長の権限に基づき、卿を統制教会の一員と認め、二等遊師の地位と、エレウテリアというコードネームを授ける。遊師の使命は分かっておろう。本来は諸地方を渡り歩き教えを説き、各地域の文化習俗を記録することだ。……だが今回卿にしてほしいことは違う。伝達者、つまり地方都市群落に中央都市の再興を知ろしめてもらいたい。まだ中央都市の再起を知らぬ民が地方にはいる。彼らに希望を与えるのだ。頼んだぞ」

＊

エレウテリア。希国の言葉で自由を意味する言葉らしい。私の役目は自由を告げる者だから、なのだろう。中央都市に権力や商工業のハブを置き、地方都市をスポークとする体制は、大災害によって中央都市が陥落したことによって完全に裏目に出た。地方都市同士の連携の弱さと、地方都市の自立力の不足によって、中央都市からの連絡が途絶えた地方都市の人々は途方に暮れる。その困難からの解放者、自由と希望を告げる者。それが私。

あの任務を貰ってもう六年目になる。あれ以来中央都市には戻らず、地方を歩き続けている。荒れた野原を歩き、暗くなったからこそよく見える星空を眺め野営する生活は、なんだかんだで楽しい。中央都市の残骸に囲まれているよりはずっと良かっただろう。他の人よりも精神が摩耗していなかったということは、私だけがただまともだったということだ。そんな中央都市にいたままなのは正直うんざりしていた。あの任務を貰って嬉しかったのだ。

だが、この任務には嫌気の差すところがたくさんある。例えばまず一つ目は、自立力のない地方都市に自立しろということの残酷さ。中央都市が強力なハブとして自立力を奪ってきたのに。

二つ目は、『中央都市はもうすぐ復活します』という偽りの希望を吹き込むことだ。希望を込めた優しい嘘。裏返せば、真実は絶望にまみれた、残酷なものということになる。中央都市を一度見れば、再起動など到底不可能であることを誰もが察するはずだ。中央都市再起動を目指していた人たちの誰も、多分導師さまですら、本気でそれが叶うとは考えていないだろう。あの人たちはあくまで、絶望的な真実に対面したくない一心で再起動なんていう大言壮語を吐いているに過ぎない。真実に適応できずに狂って死ぬか、狂ってないと狂信して目をそらし続けるかの違いだ。

そして三つ目、何よりも大きいのが、大災害で壊滅的被害を被ったのは、中央都市だけではないという事実を突きつけられる、ということだ。事実として、ここまでに六年かけて百近い地方都市を訪ねてきたが、この町のように全滅した村がちょうど七十、痕跡がわずかに残るだけだった街が十四、忽然としてとうとう見つからなかった街も一つや二つではない。生きた人間の一人でも残っている街は片手で足りる。まともな意思疎通のできる人間が残っていたのは、ゼロだ。

夜が近づいて寒くなる。毎晩の様に聞く焚き火の音にもいい加減飽きるという感情を抱くことすら億劫になってきた。建材だったであろう木がそこらにごろごろあるからくべる木には困らないが、乾いていないのが多くて困る。辛うじて屋根の残っている廃墟に行くしかなかった。

大きな家族の家だったのだろうか、ベッドが多い。いくつかのベッドは骸骨を寝かせている。期待はしていなかったが、やはり食料や飲料の類はない。

机の上にはコンロがある。ガスは少しだけ残っているようで役に立ちそうだから持って行くことにするが、当然コンロ自体には何も乗っていない。その脇には古びたアルバムが置いてあった。『誰か持って行ってください』とある。その中身は、いつかの住民たちの写真たちだった。村の祭だろうか、キャンプファイヤーを囲んで踊っていると思われる写真や、農業に勤しむ姿、食卓を囲む家族の姿。ほとんど笑っている写真ばかりだ。写っている家族はひとつだけではないから、たぶん村共有のカメラだったのだろう。どうやら大災害の跡の写真は一枚もない。たった一枚、おそらく中央都市の方角の空に真っ赤な火柱が昇っているのがある。これが最後の写真のようだ。このアルバムは、この町が確かに存在した最後の証拠。もうこのアルバムを見た私以外に、この町の在りし日の姿を知っているのはいない。そう考えると少しナーバスになる。

ふと、床に蓋があるのに気付いた。地下室か、倉庫だろう。やたら厳重に封印されているのが気になって、無理矢理開けてみる。やはり地下室のようで、階段が続いている。

マントルランタンを提げながら階段を恐る恐る降りていくと、そこには四方を四角い石で囲まれた広くない空間があって、奥の壁に何かが寄りかかっている。また骸骨かと思ったが、機械だった。人の形をしている。足の片方が破損していて、自立はできなさそうだ。

機械が音を立てる。起動した。私が来たことに反応したのだろうか。機械はどこからか、男性に寄せた機械音声でこう言った。

《私は第五世代人格搭載ロボット、F―580。異郷の使者よ、あなたを歓迎します》

ロボット。図書館で記述を見たことがある。確か数百年前、技術の絶頂として作られた人造生命。高価だったが、かつてはほとんどの地方都市にまで一台は普及し、人間のよき友であったという。だが何らかの理由でその製造と利用は禁止され、いつしか存在ごと忘れられていった存在。初めて見た。

読んだときは少し興味を持ったものだが、実物を見るとがっかりする。数百年放置されていたとはいえ、見た目があまりにみすぼらしい。人間を模した金属の手足と胴体があるだけ。それもいたるところにパイプやコードが通っていて、肌なんてものはない。金属の表面は錆が深刻で触りたくもない。触ったところで何の温かみも感じることはないだろう。所詮、作られた生命。応対も機械的だ。プログラムに則ったただ喋るだけの機械と何が違うのか、見分けがつかない。

だが、この任務に出て早六年。ほぼ初めて意思疎通をする。声は出せるし、問題はないはずだが、いかんせん六年ぶりの会話だ。変な緊張を覚える。落ち着け、相手はたかが機械。まずは挨拶を返すのだ。

「私は統制教会二等遊師、エレウテリア。ある任務で中央都市から来ています」

《エレウテリア遊師。ロボットというものを知っていますか》

「多少は。禁止されているはずの古代技術ですね」

知っていてよかった。知らなかったら機会に講釈を垂れられるところだった。

《でしたら話が早い。私はその禁止令の出る前に製造された量産型のロボット。製品としては『ネイバー』と呼ばれていましたが、禁止令が出されました。この町の人々は私の破壊を躊躇い、地下室に封印しました。禁止令が比較的早期に解除されると見たのでしょう》

「だけど、そうはならなかった」

《はい。封印されてから二百年強が経ちました。エレウテリア遊師がいらしたのは、その禁止令に関することですか》

「いいえ。七年前、大災害が発生したことで中央都市はじめ諸都市に壊滅的な被害が出てしまい、その被害状況の伝達の任務にあります」

《そうでしたか。お疲れ様です》

「機械に感謝されても」

《……あなたは私を機械として見てくれるのですね》

「あたりまえでしょう。あなたは人間ではないわ」

言葉にちょっと苛立ちが出てしまい、丁寧語が崩れる。やっぱり人と喋らないと、情緒が乱れる。だがそれをお構いなしに機械は続ける。

《正直その扱いをされて私は嬉しいのです。かつてロボットが禁止されたのは、ロボットと人間の境界線が曖昧になりかねなかったからです。私は町の人々に隣人として扱われ、私も彼らを愛していました》

「機械に感情なんてない。あなたのそれは美化か幻想よ」

《……そうかもしれません。でも私は地上が気がかりなのです。数百年経ち、私のことを知るものは誰もいないでしょう。ですが。エレウテリア遊師、お聞きしたいことがあります》

やはり村にはもう誰も生き残っていないことは知らないようだ。知らせる義務もない。思い出に浸らせておけば、暴走することもないだろう。

「何かしら」

《災害があったと聞きましたが、あなたはその被害の報告をこの町にしに来たのですね》

「その通りよ」

《つまりこの町は、まだ人が生きている。笑顔があるということなのですね》

「――――ッ」

《回答が確認できませんでした》

「……」

《回答が確認できませんでした》

「 」

《回答が確認できませんでした》

「……災害の被害は酷いから、みんな顔は暗い、かな」

嘘。嘘。優しい嘘。嘘は希望だ。現実を知れば絶望する。悲しむ。……悲しむ？　機械が？

《……そうでしたか。でも大丈夫でしょう。生きている限りは、顔を上げ、前を向く力が誰にでも備わっています》

この機械はなんて優しいのだろう。機械に見られるのが嫌で俯いた。

「……うん」

そうとしか言えなくて。

「きっとそうだね」

私は今日も、嘘を吐く。

あれ、私は何に嘘をついているのだろう。

＊

生木がわずかに残っていてやはり煙い焚き火に、手を近づける。星空は曇って見えない。

アルバムは置いてきた。あれを形見として持ち帰る信念があったなら、私のバッグはとうにそんな形見で溢れかえっている。

あの機械――――いやロボットの一件から、私は自分のことを見返り続けている。

私は何のために嘘を吐くのだろう？　人間は停滞から脱するのに希望が必要だ。絶望を振り払わなければいけない。それが偽りの希望であろうと、本物の絶望よりはずっとましだ。だから嘘を吐く。希望を吹き込むもの。

絶望から解放するもの。それがエレウテリアという言葉に込められた意味だ。
少なくとも私はそういう風に正当化して来たが、しかし、さっき私は機械にまで平然と嘘を吐いた。絶望しない者に。希望する必要のない者に。人間に嘘をつき続けて、人間以外に嘘を吐くことを厭わなくなってきた。

……いや、いや。本当にそうだろうか？
全滅した村がちょうど七十。痕跡がわずかに残るだけだった街が十四。忽然としてとうとう見つからなかった街も一つや二つではない。生きた人間の一人でも残っている街は片手で足りる。まともな意思疎通のできる人間が残っていたのは、ゼロだ。
……私は最初から、人間相手に嘘を吐いたことなんて、一度もないじゃないか。いるとしたら、一人だけ。

そもそもこの先の旅路、いやすべての地方に、人間は残っているのだろうか？
希望を込めた優しい嘘。
裏返せば、真実は絶望にまみれた、残酷なものということになる。

『まだ中央都市の崩壊を知らぬ民が地方にはいる。彼らに希望を与えるのだ。頼んだぞ』

任務を貫った私は。コードネーム（エレウテリア）を貫った私は。
嗚呼、希望に満ちていた。